

源氏鶏太
停年退職

朝日新聞社

書名 停年退職

定価 四〇〇円

昭和三八年二月一〇日第一刷発行
昭和三八年二月十五日第二刷発行

著者 源氏鶏太

発行者 伴 俊彦

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

東京大版
小倉名古屋

© 源氏鶏太 一九六三年

停年退職・目次

停年待ち

ある停年退職者

おすし

課長

酒場

社員食堂

土曜日

7

21

42

61

82

139

168

趣味と実益

幸福について

ある結末

参事室勤務

夕陽を美しく

あとがき

208

228

271

340

380

417

装幀

佐野繁次郎

停
年
退
職

停 年 待 ち

「君、血圧は？」

「ちょっと、高いんだよ」

「いくらあるんだね」

「上が百七十で、下が九十八。君は？」

「僕は、まァまァだよ。そのかわり、どうも胃の方が、近ごろ、重苦しいような気がする」

「癌じゃ無いんだろな」

「よしてくれよ、縁起でもない」

「もちろん。だが、それだったら早く診てもらっておいた方がいいよ」

「うん……」

「あのタコを覚えていたろう？」

「ああ、勉強の出来なかった奴。しょっちゅう教室で立た

されていた？」

「そう。あの男が三年前に亡くなったのは、癌だったらしいんだ」

「そうか……」

矢沢章太郎は、聞いていて、

（俺には、血圧の心配はないし、それに、癌の心配だってないようだ）

と、思っていた。

別のところで、

「近ごろ、ゴルフを熱心に行っているという噂だが」

「あんな面白いものは、世の中にないからね」

「そんなに？」

「そう。酒よりも、女よりも。接待にも役立つし、第一、健康にいいからね」

「らしいな。ハンディは、いくつになった？」

「二十二だ」

「二十二というのは、うまいのかい？」

「でもないが、この年で、しかも、二年前から始めたんだから、相当なものだよ。君も、始めたら？」

「始めたいんだが、金と暇がたいへんだらう？」

「なに、始めてみれば、なんとかなるもんだよ」

「では、近いうちに、君から手ほどきを受けようか」
「いいとも」

矢沢章太郎は、聞いていて、

（俺は、ゴルフどころではないんだぞ）

と、思っていた。

さらに、別のところで、

「僕ンとこの息子、来年大学を卒業するんだが、いいところがあったら世話してくれないだろうか」

「そうだな。それより、僕の娘は、もう二十三になるんだよ。いいお婿さんがあったらよろしく頼む」

「二十三にもなって、まだ、恋人がないのか」

「と、僕は、思っているんだが」

「案外、知らぬは親ばかりかもわからないな」

「かも知れない」

矢沢章太郎は、自分の子供たちのことを思い出して、細君には、五年前に先立たれたのだが、のぼると章一の二人の子供がある。章一は、高校生だが、のぼるの方は、二年前に高校を卒業して、今では会社勤めをしている。しかし、のぼるに恋人があるかどうかは、章太郎は、まだ知っていなかった。

「あと一人、長岡君だけだな」

一人が、待ちくたびれたようにいうと、別の一人が、思いついたようにいった。

「そうそう、長岡君は、今日で、会社を停年退職になるんだといっていたよ」

どちらかといえば、それまでは、気楽な空気がこの部屋に流れていたのである。が、とたんに、さっと重苦しいものに一変したようであった。

（停年退職……）

矢沢章太郎は、それとなく唇を噛みしめた。他人事ではないのである。章太郎自身の停年退職の日が、半年後に迫っていた。ために、ここ二、三年は、停年退職という言葉をして、しよっちゅう頭の上のせているような生活をして来ていたのであった。さっきからだって、絶えずそのことを念頭におきながら、人々の話を聞いていたのだ。

しかし、そういう思いは、章太郎だけではなかったはずである。ここに集まっているおよそ十人のうちの過半数は、口にくそ出さなかったが、章太郎とおんなじであったに違いない。

新宿のすし屋の二階であった。会費千五百円で、同窓会が開かれようとしているのである。三十数年前に、北陸の

T市の商業学校を卒業し、目下、在京している連中ばかりの集まりなのだ。数年前から年に一回は、開かれることになっていった。

こうやって集まってみると、たのしいには違いないが、同時に三十数年間という歳月は、なみたいていでなかったというところが、あらためて考えさせられるような会であった。かつての秀才は、いまだに課長でいるのに、それほどでなかった男が、重役にまでのし上がっていたりしている。かと思えば、株屋の歩合外交員になっていたたり、ブローカーになっていたたり、している。顔つきだって、よく見れば、昔の面影を残しているが、しかし、重役になっている男には、それ相応の貫録がしぜんにそなわり、課長は、やっぱり、課長顔で、ブローカーになっている男には、どうながめても、サラリーマンらしいところがない。

いったい、三十数年前に、だれが今日の結果を予想したろうか。しかし、ひるがえって思えば、それぞれが落ちつくところへ落ちついたようだともいえるのである。一人一人に、運不運がつきまといっていたであろうが、しかし、世の中とは、それほど不公平でなかったとの感慨もわいて来そうであった。

矢沢章太郎は、東亜化学工業株式会社の厚生課長なので

ある。T市の商業学校を卒業すると、同じT市の高等商業に入り、卒業後、直ちに東亜化学工業に入社し、今日に至っているのだった。

東亜化学工業は、資本金十億円で、従業員も千人を超している。その中の課長なのである。七年も前から課長をしているのであった。七年前に、この分では部長になれ、さらに、取締役部長にもなれるのではないか、との夢を見た。取締役になれたら、停年が五年間延長され、六十歳まで勤めていられるのである。が、その夢はすでに絶望と決っていた。あと半年間で、サラリーマン生活に終止符を打つべく運命づけられていた。

およそ十人のうち、さつきまで、血圧やゴルフのことを話していたうちの二人は、ともに重役になっているから、目下のところ、停年には無関心のようだ。そして、歩合外交員とブローカーになっている二人も。あとの六人ぐらいが、だいたい同じ年だし、停年ということに、最大の関心を寄せているに違いなかった。

「そうか、長岡君は、今日で、停年退職になるのか」
一人が感慨深げにいった。

「だから、ちよっとぐらい遅れるかもわからない、といっ

ていた」

「では、先に始めていようか」

一人が腕時計を見て、

「まだ、六時十五分だ。半まで、待ってやろうじゃあないか」

だれにも、異議がないようだった。

しばらくたって、別の一人が、

「停年退職か……。それから第二の人生が始まるのだと思えばいいというけれども、とてもとてもそんな気になれないからな」

と、やや自嘲的にいうと、

「そうだよ。退職慰労金の千万円もくれるんなら別だが、僕の会社なんか、二百五十万円ぐらいなんだからな」

「それから税金を引かれる」

「いくらぐらい引かれる？」

「君の場合なら十万円ぐらいだろうな」

「残り二百四十万円か。僕とこは、三人の子供が、まだ一人前になっていないし、どうしても月に四万円いるんだ」

「六十カ月、五年間だな」

「そのあと、いったい、どうしてくれる？」

「そんなこと、僕にいったってしょうがないよ」

「しかしね。僕は、停年退職のことを思うと、妙に人からみつきたくなるんだよ。でなかったら、泣きたいほど憂鬱になってくる」

「君だけではないさ」

「すると、君も、か」

「そう」

「安心していいいわけか」

「何事も運命だと思って、な」

「こいつめ、いやに達観しているようなことをいうぞ」

「冗談いうなよ。達観どころか、焦躁の毎日を送っているんだ。一年ほど前から、仕事の方は、二の次にして、次の就職口をさがしてまわったり、なんとか、一年でも停年を延期してもらいたいと、やたらと重役に頭をベコベコと下げてみたり、自分ながら情けないもんなんだよ」

「その結果は？」

「さっきもいった通り、何事も運命だと思え、ということだ」

「君でも、やっぱり、そうだったのか」

「だいたい、五十五歳なら働き盛りだよ。その五十五歳で停年というのは、不合理だ。いや、残酷だよ」

「近ごろ、一年延長したり、二、三年だけ、囑託として残してくれる会社もふえて来ているようだが」

「しかし、ほんの一部だよ、そんな会社は」

「辞めたあと、年金をくれる会社も出来つつある」

「あれがもらえると、ありがたいんだが」

「僕の会社では、組合が動いてくれている。だが、今年の間に合いそうにもない」

「ここにいるうち、何人が今年中に、停年になるんだ」

五人が今年中で、一人が来年ということがわかった。

お互いに顔を見合せて、苦笑した。まるで、人生の敗残者たちのようだ。そんなはずがないし、あってもならないのだが、実際には、そういう劣等感を持て余しているのがあった。

矢沢章太郎は、さっきからどちらかといえば、聞き役にまわっていた。といって、いいたいことがないわけでは、ない。いっぱいあるのだ。が、それをこの席でいつてみたところで、どうにもなるものでないと知っているからであつた。

章太郎の胸算用では、退職慰労金は、三百万円ぐらいもらえるはずであつた。そのほかに、百万円ぐらいの貯金がある。

してある。合計四百万円。が、四百万円では、この先、何年生きるかわからないのだし、高校生の息子には、ぜひ大学を卒業させてやりたいし、あれこれ、心細いのだ。娘にだって、人並の嫁入り仕度がしてやりたい。母親のない娘だけに、いっそうのふびんがかかるのであつた。

（あと三年といたいたいのだが、せめて、あと一年でも働きたい）

あと一年間、収入があるということは、プラスマイナスで、ばかにならないのである。そして、その一年の間に、もっと必死になつて、次の就職口をさがしてまわることなのだ。

章太郎が、この一年間、次の就職口さがしにそれほど熱心でなかった理由の一つは、もしかしたら、あと一、二年、今の会社に残れるかもわからぬというあてがあつたからだつた。めつたにないことなのだが、しかし、そういう例が皆無ではなかつた。昨年、停年になつた男が、特に会社において必要な人物だとして、二年間だけ囑託として残っている。

章太郎は、自分自身が、会社において特に必要な人物だ、といい切れる自信はなかつた。そうのような気もするし、そうでないような気もする。しかし、二年間囑託勤務

を許された男にしたところで、似たようなものであったのだ。結局は、重役のハラ一つ、ということらしいのである。

(それなら、俺だって……)

章太郎は、そう思いたいのであった。そして、そう思う心の底には、同期に入りながら、今は、常務取締役としてときめいている相原安夫をあてにするものがなかったとはいい切れないであろう。

もっとも、章太郎は、そのことについて、一度も相原常務取締役役を頭を下げていないのである。それとなく、ほめかしたことはあるが。一方は、大学出、こちらは、高商出。そこにはじめから差がついていたけれども、一応は、出世を競った間柄なのである。結局、三十年の間に、常務と課長というような大差がついてしまったが、章太郎の方が普通で、相原は、抜群の出世をしたことになる。そのくせ、章太郎は、相原の実力については、どうしても認められないのであった。ただし、これは章太郎のひがみ心のせいであつたかも知れない。

相原が、もし、自分のために強く発言してくれたら、あるいは、一、二年間の囑託勤務も可能なような気がしている。章太郎は、相原には、頭を下げるなかつたが、相原

の方で、勝手にそのようにはからつてくれないものかと、虫のいいことを考えているのだつた。

しかし、今は、そんな虫のいいことを考えてばかりいられなくなつていた。何故なら、昨年、囑託勤務を許された男に、その内示があつたのは、停年の日の半力年前だと聞いている。とすれば、章太郎にも、そろそろそういう内示があつてもいいころなのである。

(近いうちに、相原君に頼んでみよう)

「どうも、遅くなつて」

そういいながら、長岡常吉が入つて来た。人々は、ヤァヤァといつて迎えた。章太郎は、もしかしたら長岡が、半分めそついた顔で現われるのではないか、と思つていたのである。そういう顔を見るのは、辛いし、やりきれないとも。しかし、長岡の顔は、思ひのほかには明るいようだつた。

章太郎は、ほつとした。そして、自分だつて、かりに相原との話がうまくいなくても、あの程度の顔をしていなければならぬ、と自戒した。

ただちに、酒と料理が運ばれて来た。すし屋の二階での宴会なのだが、出る料理は、ありふれた日本料理であつた。

それまで、思い思いに散らばっていた人々は、テーブルを二つつなぎ合わせた周囲に、勝手に集まった。同窓会だから身分の上下はないのである。ただし、長岡だけは、本日停年退職の故を以て、床の間を背にした真ん中の席をあてえられた。章太郎は、その横に座った。

「では、長岡君の停年を祝して、カンバイをしようか」

「いいね」

「おめでどう」

「おめでどう」

「どうも、有りがどう」

長岡は、軽く頭を下げて、

「しかし、あんまりおめでたくないな」

と、苦笑した。

「わかる。だが、明日はわが身なんだし、どうもご愁傷さま、というわけにもいかんじゃないか」

「そう。まァ、長い間、ご苦労さま、というところだろうな」

「どうだね、今日の感想は？」

「一口にいえば、やっぱり、感慨無量というところだな。」

しかし、前々から思っていたほどでもなかったよ

「と、いうと？」

「肩の荷が軽くなったような、そして、重役にだって、もうベコベコしなくてもいいんだというような一種の解放感」

「うんうん」

「殺人電車ともお別れだ」

「うんうん」

「実をいうと、僕が遅れたのは、特別の用事があったわけではないんだ。みんなが帰ったあとのガランとした事務室の、明日からは他人の机となるその机に向って、しみじみと別れを惜しんで来たんだよ」

章太郎には、そういう情景が見えてくるようだった。そして、あるいは、自分も、同じようなことをするかも知わからない、とも。

「僕は、そこで入社以来のいろいろのことを思い出していたんだ。気がついたらね」

長岡は、人々の顔を見まわして、

「机の上をなぜながら、うつすらと涙ぐんでいたよ」

ちよつと、間をおいて、

「考えてみれば、バカな話だが。もう一つ、会社を出てから、何度も何度も、自分の席のあった窓のあたりを、振り返って見ていたな。心の中で、さようなら、さようなら、

といいながら」

人々は、しーんとなった。歩合外交員をしている吉田光次が、その沈黙を破った。

「やっぱり、僕は、サラリーマンにならなくてよかったよ。だって、僕の商売には、停年なんてものがないからな」

すると、ブローカーをやっている室井忠雄も、

「全くだな。僕も、それをいおうとしていたところなんだ」

と、嬉しげにいった。

そこに、悪意のようなものがあるわけはなかった。しかし、歩合外交員も、ブローカーも、過去のこの会では、どちらかといえば、多少の職業的な肩身のせまさを感じていたらしいのである。それから解放される喜びが、ついそんな発言となったのであろう。

もちろん、誰も咎めたりしなかったし、二人も、それ以上のことをいわなかった。酒がまわったが、出ばなを挫かれたように、いつもほど、人々の気分が弾まないようであった。

「僕は、停年退職という、思い出すことがあるんだよ」

同じく年内になる岡藤藤吉が、人々の顔を見まわ

すようにしていった。

「どんなことだね」

すでに重役になっていて、当分の間、停年の心配のない山崎昭三が鷹揚にいった。

「今から十一、二年ぐらい前のことだと思ってくれたまえ」

「まだまだ、インフレの凄じかった頃だな」

一人が、当時を思い出したようにいった。

「そう。ある日、その三年程前に停年退職になったK氏が、ひょっこり会社へ現われたんだよ」

人々は、耳を傾けた。

「K氏は、課長にまでなった人なんだ。在職中、相当な人望もあったし、みんなが歓迎したんだ。しかし、そういう歓迎にも限度があるし、やがて、みんなは自分の席に戻った。K氏は、それなのにいつまでも、僕の横にいるんだよ。といって、特別の用事があるようでもなく、会社の前を通りあわしたから、ちょっと寄ってみただけだといっていたんだ」

「……………」

「……………」

「正直に言って、僕にだって仕事があるし、いつまでもK氏のお相手はしてられない。晩に一席をとも思っただ